

スプシ図書館へと襲撃しに来た結城友弥は、数多の障害を乗り越えながら遂に目標であった宿敵アッシュルバニーモンに邂逅する。

「ああー！もう！実家にまで押し入って！友弥様は本当にしつこい！どれだけ私が好きなんですか！でもでも、私もそんな友弥様が大好きですわ！もしかして、これって両思い！？」

「……何がなに！？…はあ、何にしてもアッシュルバニーモン…貴女との因縁は今日ここで終わらせます！」

世迷言を発しながら舌なめずりして友弥を迎えるアッシュルバニーモン。

それに友弥は右から左に聞き流すとディースキャナを掲げスピリットエヴォリューションを行う。

遂にスプシ図書館にて2人は激突する。

互いにスライドエヴォリューションとモードチェンジで姿を常に変えながら戦う両者。しかし、その戦いも徐々に片方の優勢へと傾いていく。

スプシ図書館というアシュバニの土俵ともいえる場所での戦いに結城友弥は圧されていく。友弥がメディーバルリンクモンに進化すればアシュバニは獣兎の巨体と暴威でいなし、モノブロモンに進化すれば人兎の姿となってその素早い身のこなしで翻弄し巧みな格闘術で削っていく。

その態度や見た目とは裏腹にアシュバニは多くの知識を取り込んだ戦上手であった。

しかし、友弥とてその強さは幾度も戦いでわかりきっていたこと。だが、今回は今まで以上に圧され苦戦を強いられている。

今までとは明らかにアシュバニの出力が違っていた。それは戦う場所に問題があった。

スプシ図書館、ここはアシュバニの生まれ故郷という正に相手の土俵である。

アシュバニにとっては勝手知ったる場所であり、アシュバニの餌にもなりうるデータが膨大に集積された地であったのだ。

その身が傷つけば周囲のデータを『メモリーコレクション』で収奪し、収奪したデータは更に『シェアードライブラリ』で押し流す。

まるで永久機関かの様に繰り返す再生と波濤に遂に友弥は限界に達して倒れ伏し人の姿に戻ってしまう。

「ふう、やっと斃れましたわね。友弥様、貴方はよく戦いましたがもう終わりですわ。」

倒れ伏す友弥へと人兎モードの姿でコツコツと近づいていくアシュバニ。

「……ふふ…ふふふ。最初はこんなところまで追われてどうしようかと思いましたが僥倖でしたわね。これで友弥様の全ては私のモノですもの！」

そうしてアシュバニは友弥の下に近づくと友弥の頭を掴み顔を上げさせる。

それに友弥は意識を朦朧とさせながらも抵抗するかのように身体を暴れさせる。

だがしかし、その抵抗も無駄だと言わんばかりにアシュバニは力強く友弥の身体を押さえつけながら互いの顔を近づけさせる。

「…ああ、友弥様！ようやく、これでスプシモン時代からの夢が叶いますわ！友弥様、覚悟…してくださいね？」

どんとどんと近づいてくるアシュバニの顔。

「な、なにを...や、やめ...！」

何をするのかはわからないが必死に顔をそらそうとする友弥。

しかし、そのそらした顔はアシュバニによってガシツと両手で前に固定されてしまう。

固定をするとアシュバニは顔を更に近づけていく。そしてキス寸前の所で一度止まると一言小さく呟いた。

「.....いただきます」

そう呟くとアシュバニの唇と友弥の唇が合わさった。キスである。

しかし、ただのキスではない。それは貪るように舌と舌が絡み合う暴力的で濃厚なディープキスであった。

「ん...♡ちゅっ...♡...ちゅぱっ.....♡じゅるるるるっ.....♡.....じゅっぽ.....れろお...♡...んっちゅ.....♡」

「...ん！？.....あ`...んぶ.....あ.....っ...！」

先程まで戦場であったこの場にそぐわない濃厚なソレに友弥は息も出来ずに目を白黒とさせながら戸惑う。

その反応を知らぬかの様にアシュバニは友弥の唇に舌に夢中で貪っていく。

その有り様はまるでカラカラな砂漠で死にかけの中で一滴でも無駄にしないように水を啜るかの様な必死さであった。

「あむ♡じゅるるるっ...じゅちゅ...♡ん...れりゅう.....ちゅっぷっ.....♡」

「...う.....や...め.....お`あ.....うあッ...！」

友弥の口の中で舌を絡みつかせていたアシュバニ。今度は挿し込んだ口の中から友弥の舌を絡めながら外に出すとアシュバニは自身の口に啜え込んでちゅぷちゅぷとシゴク様に動かしていく。

粘度の高い水の絡みつく音を立てながら行われるキス。その絡みつく深いキスの状態でアシュバニは何かを飲むかの様にゴクゴクと喉を動かしていた。

それこそが貪るように夢中で行われるこの行為の本質であった。舌で弄ばれ舌先が痺れ疼く中、友弥は薄れる思考と共に何かが心身から流れ出していくのを感じていた。

濃厚なキスなのだから唾液が流れ、アシュバニに飲まれているのだろうか？それは確かに飲まれているだろう。

しかし、問題はそれだけではない。酸欠しているかの様にクラクラさせながら友弥は確信する。

これはキスをしながら己のデータを吸い出し貪っているのだ。わざわざキスをする意味はわからないがデータがどんどん抜き取られているのは確かだろう。

「れりよ...れりよお...♡じゅぷっ...じゅぷっぷっ...♡.....ん...ちゅ...ちゅるっ.....♡」

「ちゅ...ちゅ〜っ...♡.....ん...うま...♡.....じゅるるるるっ♡♡♡」

「...ゆうや.....ん...ちゅ♡.....しゅき...しゅきい.....ずじゅっ...ちゅっ.....♡」

キスをしながらいつの間にか2人は限界まで密着していた。執拗に口付けを繰り返す友弥からデータを収奪するアシュバニ。  
快楽に湯だつ思考の中、これがファーストキスなのかなんておかしなことを考えながらも友弥は自身の死が間近に迫っていることを感じている。

———覚悟を決めて来たつもりだ、その結果がこの終わりか…。

———クラビスエンジェモン様にただただ申し訳ない…。

———エンシェントヒーローモンを継ぐ存在として選ばれたのになんて情けない…。

———でも、これはこれで悪くない…かも…。

そして結城友弥は息絶えた。

#### ■この後の展開

アッシュルバニーモンは結城友弥の全データと2種のスピリットをまとめて食べれたと思ひ満足気にしていると、お腹をくだしたかの様に突如苦しみだす。

アシュバニの中では結城友弥はその精神データが完全に解される前に自身のスピリットと対面していた。

スピリットとの対話の中で改めて自身の弱さを認め、その大事な使命を再確認した。

そうして戦意を取り戻した結城友弥はアシュバニの中でWスピエヴォに成功しカインモンに進化する。

未だアシュバニの体内に囚われる中、『勇』が持つ退魔の力を流用した技『竜剣』を用いて脱出に成功する。

再戦では先程とは打って変わってアシュバニが押される戦況となる。カインモンは人兎のスピードに追いつき、獣兎のパワーを凌駕していた。

遂に業を煮やしたアシュバニはスプシ図書館の損害も無視して周囲のデータを飲み込んで一気に『シェアードライブラリィ』で押し流そうとする。

その波濤にカインモンは一度ジャンプすると手に携えた聖槍を突き出し大質量のデータの波をかき分け突撃する。

カインモン最強の必殺技『ハイウィンド』とアッシュルバニーモン最大の必殺技『シェアードライブラリィ』がぶつかり合い大爆発を起こす。

爆発で巻き起こったデータの奔流が晴れた先には倒れ伏し自身のコードを浮かび上がらせるアシュバニとディースキャナを掲げるカインモンの姿であった。カインモンはデジコードスキャンを行い『識』のビーストスピリットをスキャンした。スキャンが終わり残ったのはアシュバニの元となったウサ耳を生やした白いスプシモンだけであった。

この後、その勢いのままにエンモニに挑むもアシュバニ戦の疲れもあり攻めきれず、防衛側も集い始め袋叩きに合う。友弥はそのまま涙目敗走することになるのだった。逃げる際に後ろから掛けられたエンモニの「娘をよろしくね～」という声は聴いてない。そんなの知らない。元アシュバニのスプシモンに憑かれてるだけ。こっちが襲われたのにいつの間にか責任取らされる側になった恐怖。